

## 平成 24 年度 第 8 回 マザーレイクフォーラムびわコミ会議運営委員会 議事録

日時	2013 年 3 月 7 日 (木) 18:15~21:00	
場所	滋賀県庁防災対策会議室	
出席者 (50 音順、 敬称略)	井手 慎司	滋賀県立大学環境科学部
	石河 康久	滋賀県琵琶湖環境部琵琶湖政策課
	川端 隆弘	公益財団法人 淡海環境保全財団
	北田 俊夫	NPO 法人 びわこ豊穰の郷
	小林 泉	滋賀県琵琶湖環境部琵琶湖政策課
	佐藤 祐一	滋賀県琵琶湖環境科学研究センター
	田仲 輝子	滋賀県琵琶湖環境部琵琶湖政策課
	中野 隆弘	びわ湖エコアイデア倶楽部
	野田 晃弘	NPO 法人 蒲生野考現倶楽部
	松沢 松治	びわ湖の水と地域の環境を守る会
	三和 伸彦	滋賀県琵琶湖環境部琵琶湖政策課
	村上 悟	NPO 法人 碧いびわ湖
望月 孝幸	滋賀県琵琶湖環境部琵琶湖政策課	

※今回欠席（敬称略）：伊吹美賀子（琵琶湖流域ネットワーク委員会）、関慎介（滋賀県琵琶湖環境部琵琶湖政策課）、堀彰男（滋賀県魚のゆりかご水田プロジェクト推進協議会）、山口美知子（滋賀地方自治研究センター）、渡辺維子（元：公益社団法人滋賀県環境保全協会）

### 今回の決定事項（要約）

- ・ 運営委員会は、びわコミ会議の企画・開催だけでなく、広くマザーレイクフォーラム全体の内容について検討する場とする。
- ・ マザーレイク 21 計画を市民のものとするため、今後まずは各地域（団体）で取り組まれている活動を計画に位置付ける作業を進めていく。

### 1. マザーレイクフォーラムのロゴについて

今後、WEB サイトでの使用やマザーレイクフォーラム（MLF）を地域に広げていく際に活用できるロゴの案を佐藤から 3 案提示し、意見を募ったところ、委員からは以下の通り意見が提示された。

- ・ 好みを挙手で聞いたところ、案 1 は 0 人、案 2 は 8 人、案 3 は 2 人という結果であった。
- ・ ただしロゴを今日この会議で決めるのではなく、今後どう活かすかも含めて検討することになった。具体的には、WEB サイトで募集する、次回びわコミ会議で決定するなど、決定プロセスにより多くの人に関われるような方法も提案された。

### 2. 運営委員会で扱う範囲について

現在の MLF びわコミ会議運営委員会は、運営要領によれば、年に 1 回の会議であるびわコミ会議を企画・開催するために設置されているものである。しかし実際には、これまでの経緯や課題を踏まえ、運営委員会ではびわコミ会議のこのみならず、MLF 全体のことについても議論を進めてきている。そのため、運営委員会で扱う範囲を MLF 全体に広げ、「マザーレイクフォーラム運営委員会」として

MLF の運営を行っていったらどうかという提案がなされている。

このことについて、委員からは下記の通り意見が提示された。

- ・ 補足すると、MLF 全体に広げる理由は2点ある。1つは暮らしの話など行政だけではカバーしきれない内容が存在すること、もう1つは MLF 全体に市民参加の手続きを加えていく必要があることである。
  - ・ MLF とびわコミ会議の役割分担について確認したい。びわコミ会議は元々、ML21 計画の進行管理、特に Check と Action に向けた方向性を確認する場として設置されたものだが、MLF は、それに加えて、情報交換や交流、行動のために広く集まる場ということであったと理解している。
    - MLF を広場に例えれば、びわコミ会議は年に1回広場で行われる祭りである。運営委員会の対象範囲が MLF 全体に広がれば、広場の普段の使い方など、その管理方法についても話し合うことになる。
    - 行政的には、びわコミ会議には一参加者として関わる一方で、内部的には学術フォーラムや環境審議会といったプロセスにより、びわコミ会議で議論した内容を行政の施策につなげていくことになる。
  - ・ 運営委員会の範囲を MLF 全体に広げる、つまり MLF を市民らによる共同管理のような形とした時、県や事務局（財団）との関係はどのようになるのか。
    - 例えるならば、広場の使い方に関する内容の検討はこの運営委員会で行うことになる。一方で、草刈りなどの広場の基礎的な管理は県が責任を持って行い、現在はその管理の一部を財団に委託しているという位置づけである。
  - ・ 財源の確保に関する内容として寄付金に触れているが、この理由は何か。
    - かつて流域ネットワーク委員会のときに民間から助成金を受けて、それを関係団体に配分したことがあった。そのような受け皿としても役立つような組織を目指したため、このような記載がなされている。
    - 行政が関わっているという価値は非常に高い。外から見たときの信頼性に大きくかわる。それをもっと意識するべきである。
    - 寄付金だけでなく、皆でお金を出し合って運営を行っていくイメージにしていきたい。現在は県費で賄われているが、そうすると県費が削減されたときに持続できなくなるので、県費だけでなく民間からのお金も入れていく。
    - 例えば、レジ袋の有料化に伴う収益金を活用するなどすれば、資金として切れにくく、広報手段として間口も広げられる。平和堂に MLF の発起人として参加してもらっているならば、そのような活用について相談しに行ってはどうか。
- ☆ 平和堂担当者とのコネクションのある村上氏と行政らで相談に行くことを検討する。

### 3. マザーレイクフォーラムの WEB サイトについて

マザーレイクフォーラムの WEB サイト(現在、<http://www.mlf.shiga.jp/forum> で仮公開中)について、川端氏から報告があった。望月氏より、まずは形を作り、公開していくことが必要との補足があった。

このことについて、委員からは下記の通り意見が提示された。

- ・ 今後管理者が変わっても移管できるような形としてほしい。他のサーバーでも管理可能なようにしておく必要がある。
  - 素材はフリーのものを使っており、移管する上で問題はない。
- ・ 登録して意見を書き込むフォームが、現在の形では重い印象である。Facebook などの SNS との連携についても、今後検討する。
- ・ WEB サイトの名称から、「プラットフォーム」「びわ湖環境保全活動」という言葉を削除する。

【参考：WEB サイトのトップページ（案）】



#### 4. 河川レンジャーとの交流&打ち合わせの報告について

3/1 に実施した河川レンジャーとの交流と、その後の打ち合わせについて、参加者より報告があった。報告の概要は配布資料の通りであるが、主に「ML21 計画が市民のものになっていないため、各地域（団体）の活動を計画に位置付ける」「計画の進行管理ができていないため、計画を「生きている」ものにする」の2点について報告された。

これを踏まえ、委員からは下記の通り意見が提示された。

- ・ 計画への位置づけは、2 つの点から必要である。1 つは目標を多様な主体の共有目標にできること

(それが議論や協力につながる)、もう1つは目標値の実効性担保につながることである。

- ・ 環境保全に取り組む団体だけでなく、企業や青年会議所、経済産業協会、労働組合なども位置づける対象として検討すべきであるし、むしろそちらの方がスパッと位置付けられることもある。
- ・ 庁内での計画に対する意識が低い。他部局の職員は ML21 計画のもとでやっているという意識を持ってない人がほとんどであり、庁内事業の位置づけも必要である。
- ・ 計画の目標自体も見直したり、ふくらましたりしていくことができるとよい。それが「生きている」計画である。

## 5. マザーレイクフォーラムの今後について

先の議題で計画の位置づけの重要性について共有できたことを踏まえ、その位置づけの具体的方法、およびより幅広い人に関わってもらうための方法について話し合われた。

### (1) 計画への位置づけの方法について

- ・ 流域協議会や団体、企業等で取り組まれている活動の目標を集めて、計画にはめ込んでいく作業が必要となる。
  - 位置づけの作業は、運営委員会が一方的に行うのではなく、交流の機会に計画をもとに話し合っただけで一緒に考えるなど、プロセスも関係者と共有するのがよい。
- ・ 計画について話をする機会は多々あるが、今後は計画の説明に行くのではなく、そこに参加した人たちに「計画のここをやってもらっているのですよ」と伝えたり、一緒に考えたりする場にしていかないといけない。それこそが計画をつくったことの意義である。
- ・ 位置づけを行うために、計画全体の見取り図のようなものが必要である。現在の計画の概要版ではなく、シナリオ研究会の2本柱の図のようなイメージである。
- ・ びわコミ会議で提示されたコミットメントも載せていきたい。位置付ける内容は、団体のものだけでなく、個人のものでもよい。
- ・ 次回のびわコミ会議では、位置づけの内容について発表しあう場とするのがよい。
- ・ 位置付けた内容は、WEB サイトに反映させていくことを考える。立命館大の笹谷先生など、IT を活用した参画に取り組む人もいるので、アイデアをもらえるとよい。
- ・ 前回進行を務めてくれた川本勇さんも、引き続き MLF に関わってくださると伺っている。このつながりも大事にしていきたい。

### (2) より幅広い人に関わってもらうための方法について

村上氏より以下のような問題提起がなされ、それをもとに委員間で意見交換がなされた。

- ・ 「関心はあるけど参加しにくい」という人も多くいるし、一方で「人を集めたいけれどネットワークがない」という団体も多い。しかし、いざ一緒にやろうとしても、団体側に受け入れるための姿勢や体制が十分でないところも多い。より幅広い人に関わってもらうためには、このようなミスマッチをなくすことが必要だし、そのような場をコーディネートできる人が必要だと感じている。ボランティアや団体が力をつけるようなお手伝いをできる人が必要で、ファンドを獲得することも含め、この運営委員会で検討していけないか。

- 示されたのは課題の一例であり、地域のニーズに応じて支援を行っていくというのが基本である。
- 対象範囲は環境に限定したものではなく、より広い分野にもつなげていけるとよい。
- そのような人材としてふさわしい人も具体的に思い浮かぶ。このような役割が、働き方の1つとして認められる社会であってほしい。

## 6. 次回運営委員会での検討項目について

次回運営委員会は位置づけの具体的方法や進捗について話し合うとともに、今年のびわコミ会議の内容についても検討する場とする。4月には実施する。並行して、河川レンジャーの次の団体との交流についても調整を進めていく。

### 【当日のホワイトボードのメモ】

The whiteboard contains the following handwritten notes and diagrams:

- Top Left:**
  - 他サーバーでも運用可能なように
  - 柔軟な形にする (権利関係のみに)
  - フリーのもの、OK
- Top Right:**
  - ☆ どうやってより多くの人に関わってもらう?
  - 若い人など
  - 関心はあるけど参加できない...
  - 人は「お世話です」と ネットワークない...
- Middle Left:**
  - Facebook などの活用 → 今後検討
  - Webサイト (情報発信)
  - 位置づけ
- Middle Right:**
  - 地球での取り組みを一緒に広げる
  - 「育てる」
  - このように コーディネーターが必要
  - ← ファンドを確保するのサポート
  - ボランティヤが活躍するようになればいい
  - 実行力アップ
- Bottom Left:**
  - MLの活動を行うときに
  - 個人のコミットメントも入る
  - 交流に行くとともに 計画も一緒に話し合う
- Bottom Center:**
  - ① 対象ジャンル・範囲は? (しなやかに環境に合わせた)
  - ② 即戦力の具体名は? (働き方の1つとして認められる)
- Bottom Right:**
  - 河川レンジャー = 「くぐり」
  - 世界のニーズに応じた
  - （おみね、17-7000）
  - 環境学習センター

— 以上 —